

## 日本学術会議第83回総会報告

### 改革問題を重点的に討議

日本学術会議第83回総会は、1981年10月21日から3日間開かれた。いつになく報道関係者の姿が目立ったのは、本会議をめぐる緊迫した情勢の反映であろうか。

冒頭、笠原長寿会員（第3部・経営学）の逝去を悼んで黙禱。ついで、福井謙一京大教授（ノーベル化学賞、文化勲章）、横田喜三郎元会員（文化勲章）、名取礼二前会員（文化功労者）に祝意を表する件が満場一致で可決された。

カメラの放列を浴びて登壇した伏見会長は、国際会議代表派遣問題に端を発する一連の経過、とくに総理府総務長官との「合意」から運営審議会（以下「運審」）の「見解」\*表明その他本総会にいたるまでの経緯や背景について詳細な報告を行った。その上で「学術会議の直面している事態は極めて重大である。自分としてはベストを尽くしたと考えるが、見通しや判断に甘さがある、事態の紛糾を招いた責任は免れない」と反省、あわせて副会長等との連携や事務局の掌握が不十分であったことについて遺憾の意を表するとともに、今後は運審「見解」の基本姿勢に立って行動に誤りなきを期したい、と述べた。なお、これに関連して会長は本会議の改革にあたっては科学者の総意を反映した自主改革が必要である旨表明した。

質疑の段階では、政府との亀裂を憂慮しつつ運審「見解」の担った客観的役割を問題視する意見や会長の対応に矛盾を指摘し公人としての責任を問う意見が述べられる一方、学術会議の独立性に対する政府側の誤解を衝く意見、合議体の論理として「見解」の線を当然とする意見、あるいはこの問題は広く社会的・政治的状況の中で把握すべきであるとの意見等がだされ、近来になく緊迫した応酬がかわされた。このような議論をうけて、改めて運審「見解」で示された基本線の可否がはかられ、賛成多数で承認された。本会議が、一連の波瀾を今後の教訓として活かす方向で事態を收拾したことは会員の良識と節度を示したものであろう。

ついで午前中から第2日午前中まで各部・各委員会の報告が行われた。とりわけ改革委員会報告、国際学術交流委員会報告に関連して、改革の手順や方針、代表派遣の基準等をめぐって活発な質疑応答があった。報告につき「国際リソスフェア（注 岩石圏）探査開発計画（DEL）の実施について（勧告）」が採択された。ついで障害者問題への関心を喚起し、政府や自治体に適切な施策を促す声明文が提案されたが、声明の時期、標題等

について疑義が述べられた。そのため一部修正の上、「国際障害者年に関する声明」と題する再提案が可決された。

第2日の午後はすべて、改革問題に関する自由討議にあてられた。まず、改革委員会からの改革構想の要点と問題点の説明があり、討議に入ったが、50人以上の会員が発言し会場に熱気があふれた。とくに、改革の姿勢についての数々の発言には会員の共感をよぶものが多かった。

この討議に基づいて、第3日午前に「日本学術会議の改革について（声明）」（案）が改革委員会より提出され再び活発な論議の後、採択された。声明では「我々は改革の方向が選挙によって選ばれた科学者による本会議の目的と職務を達成するために科学者との結びつきをいっそう強化すること。情勢に合わなくなった内部組織と選挙規定を改めること。また、政府と本会議との関係をよりよい方向に改善すること。などの諸点にある」と述べている。

第3日午前は研究連絡委員会（以下「研連」）問題の討議にも多くの時間がさかれた。研連は、本会議と科学者や学協会を結ぶユニークな組織で、国際学術団体との対応、国内での研究者間の連絡にあたっている。現在、研連数は59、委員定数は約1,200名である。この数では、とうてい現状にはそぐわないので、そのため研連問題の根本的検討がされてきたが、今回はその一環として研連の新しい設置基準が提案され承認された\*\*。

また、総会直前に起った夕張新炭鉱でのガス突出災害について、今後この種の災害の再発防止に関する論議が行われ、これを受けて運審において「炭鉱災害防止のための研究体制の確立について（声明）」を発表した。

本総会の会員の出席率が90%に達したことは、本会議の直面する事態の重大性と会員の責任感と熱意を示すものである。（日本学術会議広報委員会）

\* 日本学術会議月報第22巻第8号（8月号）参照。

\*\* 日本学術会議月報第22巻第11号（11月号）「研究連絡委員会等の新設及び改組等に関する措置について（申合せ）」参照。